

## 「Twitter とソーシャルメディア」にあたって

大向 一輝  
(国立情報学研究所)  
Twitter: @i2k

松尾 豊  
(東京大学)  
Twitter: @ymatsuo

2011年はソーシャルメディアがその潜在力を発揮した1年として振り返ることができるだろう。2010年末のチュニジアに端を発し、エジプトの政権交代などを促した民主化運動、いわゆる「アラブの春」では、TwitterやFacebookなどのソーシャルメディアが人々のコミュニケーション手段として重要な役割を果たしたと指摘されている。

また、3月11日の東日本大震災では、直後から数時間にわたって携帯電話の通話ができない状態が続いたが、データ通信が機能していた地域では安否情報や避難所・交通状況に関する情報など、緊急性の高い情報を交換することができるほぼ唯一の手段としてTwitterが機能した。

日常生活においても、人々の情報収集のきっかけは検索エンジンからソーシャルメディアに移行しつつある。友人の書込みから新たなニュースを知り、それを別の知人と共有するといった情報行動はごく一般的なものとなった。

2000年代初頭からBlogやSNSなど、個人間のコミュニケーションを重視したさまざまなサービスが登場し、ソーシャルメディアと称されるようになった。これらのサービスのユーザは急速に増加し、今やWebの当初からの用途であった情報・知識の共有に次いで大きなウェイトを占めるようになってきている。

世界最大のソーシャルメディアであるFacebookはユーザ数が8億人を超え、一国の規模をはるかに凌駕するようになった。また、Twitterのアクティブユーザが1億人を超えたとの発表もあった。中国ではTwitterと同様のサービスであるWeiboが3億人のユーザを獲得している。

このように存在感が増しているソーシャルメディアであるが、その本質は何であり、人間や社会にどのような影響を与えているのか。これは非常に大きな問いであり、情報工学の枠を超えて多面的な議論が必要であると思われる。本特集では、5名の若手研究者による論考からその一端を明らかにしたい。

風間 (@kazuhiko\_kazama) による「Twitterにおける情報伝播」では、ユーザのフォロー・フォロワー関係から構成される社会ネットワーク上での情報流通過程を分析している。TwitterではほかのSNSとは異なり知人関係の構築に相互承認を必要としないため、全体として

つくられる社会ネットワークの特性や情報の流れは大きく異なる。今後も大規模ネットワーク分析の対象として、Twitterから多くの知見が引き出せるものと思われる。

諸外国においては、Twitterは組織や著名人の情報発信手段として一方向的に使われることが多い。中でも、政治的メッセージを拡散させる手段として積極的に利用されている。2008年のアメリカ大統領選では、オバマ氏はTwitterやFacebookを最大限に活用したことで若年層の支持を得て当選に至った。吉田 (@ceekz) らによる「ソーシャルメディアの政治的活用」では、政治家や公共機関のTwitter利用の動向を紹介するとともに、選挙における効果や検閲の問題について議論している。

現時点では、ソーシャルメディアのユーザ層は能動的に情報を発信し、収集する人々であるといえる。小林 (@tkobyashi) の「ソーシャルメディアと分断化する社会的リアリティ」では、能動的であるがゆえに本人が欲した情報だけを選択的に見るようになり、結果としてコミュニティが閉鎖的になる可能性について指摘している。

パソコン通信の時代から、個人同士がオンラインでコミュニケーションをする際の匿名性については常に論争があった。折田 (@oritako) の「ソーシャルメディアと匿名性」では、実名か匿名かといった単純な二元論ではなく、本人到達性やリンク可能性といった属性を導入した精密な議論がなされている。また、他者によって意図せず匿名性が失われる事象や、なりすましなどの問題についても触れられている。

Twitterでは非常にリアルタイム性が高いコミュニケーションが行われており、テレビの生中継や地震などのイベント・出来事に対して即時的な反応を見ることが出来る。榊 (@tksakaki) らの「ソーシャルセンサとしてのTwitter」では、このような特性を利用し、個々のユーザをある種のセンサに、コミュニティをセンサネットワークに見立て、そこから有用な情報を抽出する手法について議論している。

Webの登場から約20年、そしてソーシャルメディアが誕生して10年と、短い歴史の中で人々のコミュニケーション様式や社会のあり方は大きく変化している。今後もさまざまな側面から分析、提案がなされるだろう。本特集がその一助になればと願っている。